リビングで会話を楽しむ初鹿野佳奈さんと次女の奈桜(なお)さん

特集

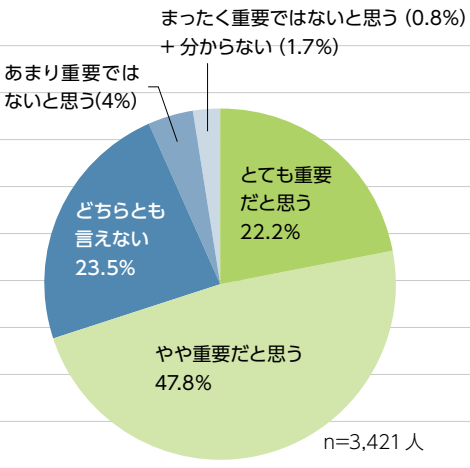
今、家庭教育を見つめ直す

新型コロナウイルスの感染拡大が招いた危機的状況（通称:コロナ禍）は、日常生活を大きく変化させた。感染予防対策として、ソーシャルディスタンスの確保やマスク着用、手洗いや不要不急の外出自粛など、「新しい生活様式」の実践が求められ、多くの人が日常生活に不自由さを感じている。

文部科学省が発表した、「令和2年度 家庭教育支援の充実に向けた保護者の意識に関する実態把握調査」（グラフ1）では、子育てに対する地域の支えの重要性が明確になった。しかし、地域のつながりが希薄になりやすい現状では、子どもの心配事を家庭で抱え込んでしまう傾向にある。

パートで働く初鹿野佳奈(はつかのかな)さん（南二丁目）は、昨年行われた市内小中学校の臨時休校をきっかけに、子どもと過ごす時間を改めたと話す。「子どもが放課後、気軽に遊びに行けなくなってしまったことで、必然的に家族で過ごす時間が増えました。子ども会や地域のイベントも、以前のようには行われなくなり、子どもが地域の人と関わる機会も少なくなってしまいました。でも、決して悪いことばかりではありません。学校の宿題を終えるまで隣で見守ったり、夕方まで一緒に遊んだりする中で、わが子の成長をより間近で感じられるようになったんです」

子どもの成長の場は、学校だけに限らない。親（保護者）と共に過ごす時間の中でも、多くのことを学んでいる。コロナ禍で家族と過ごす時間が増えた今だからこそ、家庭での子どもとの向き合い方、すなわち「家庭教育」を見つめ直す機会ではないだろうか。



グラフ1 子育てに対する地域の支えの重要さ（R2 総務省調査から作成）

親子のホンネ

地域の人に聞きました

感謝
悩み
学び…

コロナ禍は、私たちの日常生活に大きな影響を与えました。それは島田市も、例外ではありません。では、具体的にどのような影響があったのでしょうか。市内在住の親と子4人を取材し、コロナ禍で変わったことや変わらなかったこと、これまでの経験などを語ってもらいました。

親の立場

荒浪紘大（あらなみこうだい）さん
（向谷元町）

固定電話を持たない家庭もあるので、親同士のつながりがないと、子どもは遊ぶ約束をすることも難しいです。日頃からの地域のつながりの大切さを、コロナ禍で改めて実感しました。妻が子どもを叱るときは、私がヒントを与えるようにと、夫婦でしつけの役割を分担していますね。

外出自粛の影響で、子どもの生活リズムの乱れが目につくようになり、「自分がしっかりしないと」と気を張り過ぎて疲れてしまうことも。親も人間ですから、時には感情的になることもあります。でも、悩みを周りに相談したり、親同士の交流の場に参加したりすることで、気持ちに余裕が生まれました。

親の立場

安間理恵（あんまりえ）さん
（金谷栄町）

子の立場

岩田穏空（いわたしずく）さん
（横井三丁目）

お父さんとお母さんは私を叱った後に、いつもその理由を教えてくれます。コロナで一緒にいる時間は増えたけど、このことは変わりません。友達とは最近、みんなで楽しめるオンラインゲームでよく遊んでいます。気軽に会えなくなった分、学校で過ごす時間を大事にするようになりました。

自粛期間中、初めて父と一緒にゲームで遊びました。意外と上手にこなす姿を見て、これまで知らなかった一面を知れたし、楽しかったです。家族旅行（コロナ禍以前）のおかげで、歴史科目が好きになりました。多くの歴史的建造物を実際に見ることで、その迫力などを感じることができたからだと思います。

子の立場

杉山咲太（すぎやましょうた）さん
（道悦一丁目）

②親子で気軽に参加できる子育て広場「ぐぅちょきぱぁ」
③小学校入学前の準備と親子の関わり方を学ぶ「親学講座」

①保護者が学び合う機会を提供する家庭教育学級の学習会「つながるトーク」

地域の輪をつなげる身近な応援団

子育て世代が安心して家庭教育を行うことができるよう、さまざまな活動を行うのが「島田市ペアレントサポーター」だ。現在、市の委嘱を受けた15人のメンバーが、ペアレントサポーター（通称＝ペアサポ）として活動している。全員が子育て経験者であり、元教員・保育士・管理栄養士などで培ったそれぞれの経験を生かしながら、きめ細やかな家庭教育の支援に取り組む。

ペアサポ（写真）は今年度に開かれた定例会で、活動の意気込みを語ってくれた。「学習会や講座は、子育ての学びの機会であると同時に、保護者同士の交流のきっかけにもなります。行政でも家族でもない、第三者の立場だからこそ、保護者の皆さんの力になれることがあると思います。これからも、子育ての不安や悩みに耳を傾け、子どもの成長を共に喜ぶ『身近な先輩ママ』として、皆さんが地域でつながる家庭教育を提供していきます」

←ペアサポは、親が気軽に話せる雰囲気づくりを大切にする

▽ペアレントサポーターは現在、チームに分かれて活動しています。市では年に6回程度、ペアサポを交えた定例会を開催。地域の子育て現場から得た情報などから、課題を精査し、事業の見直しに反映させるなど、保護者と子どもに寄り添った支援を目指し、取り組んでいます。

【各チームの活動内容】

家庭教育サポートチーム
小学校新1年生の保護者向けの「親学講座」、家庭教育学級の学習会「つながるトーク」など

子育て広場チーム
子育て広場「ぐぅちょきぱぁ」、雑談感覚で話せる家庭教育相談 など

読書推進チーム
家庭教育講座「パパとママのための絵本の広場」や読み聞かせ、絵本紹介 など

※詳しくは、市ホームページをご覧ください。

問社会教育課☎36-7963

竹田愛咲華（たけだあさか） 書記
―― 社会教育課

田代保廣（たしろやすひろ）さん

島田市社会教育委員 議長

阪本在住。令和元年度から現職。社会教育に関する計画の立案や、市教委の諮問（しもん）への対応を担う。現在、総務省行政相談委員などを兼任する。

成長

子どもは想像以上に、親のことをよく見ている

荒波氏　妻と言い合いになってしまい、カッとなって大声を出してしまったときのことです。近くにいた娘が、そのときの様子を私の母に細かく伝えており、怖い思いをさせてしまっていたことを後日知りました。

田代氏　子どもの観察力を思い知る体験ですね。それだけ、親に注目しているわけです。言い合いの当事者ではなくても、「あのときは、○○な思いをさせてしまって、ごめんね」などのケアが必要だと思います。

子どもが将来の夢や目標について相談してきたら

荒波氏　学校だよりに、子どもたちの将来の夢が掲載されていたことがあります。見てみると、具体的な職業を挙げている子だけでなく、人としてどうありたいかを書いている子もいました。現在、大学生と高校生の娘がいます。これから、将来について真剣に考える時期が来ています。もし職業や進路について相談されたら、どのように応えたらいいのでしょうか。

田代氏　なぜ、その道を選んだのか尋ねてみてください。明確な理由があり、目標に向かって頑張っている場合は、後押しをしましょう。でも、漠然とした理由であれば、子どもが目指す人物像を、一緒にひもといてみることをおすすめします。なりたい具体的な職業などを起点に将来設計を考えると、叶わなかったときに立ち直るのが難しくなるおそれがあります。

荒波氏　「人を助ける仕事をしたい」など、子どもの目指す将来像を元に、それに当てはまりそうな進路や職業を示すことで、さまざまな選択肢があることに気付かせてあげることが大切なんですね。

対談　あのとき、どうしたらよかった？これから、どうすればいい？

家庭教育のあり方は、保護者の考え方や家族関係、家庭環境、子どもの成長時期など、各家庭によってさまざまだ。一方で、経験者の意見や家庭教育の羅針盤は、育児につまずいたり悩んだりしたときの心強い存在となってくれるだろう。今回、島田市社会教育委員の田代議長と、小・中学校PTA 連絡協議会の荒波会長が、家庭教育について対談した。両氏のこれまでの経験や家庭教育に対する考え方から、子どもとの向き合い方で大切なことを探る。

※趣旨を損なわない範囲で、発言を一部編集しました。

荒波宏則（あらなみひろのり）さん

島田市小・中学校ＰＴＡ連絡協議会 会長

川根町身成在住。令和3年度から現職（川根中）。各小中学校ＰＴＡの連携強化や、学校教育の進展、児童生徒の幸福度増進のために取り組む。

親子の関わりは、子どもだけでなく親も成長させる

田代氏　ある日、長男と次男が隣の部屋で遊んでいました。しばらくすると、次男が泣き始めたので、長男が何かしたのかと思い込み、怒鳴ってしまったことがあります。これで反省してくれるだろう、最初はそう考えていました。しかし長男は、とても切なげな表情でこちらを見ている。ハッと我に返り、長男に原因が無かったことを悟りました。状況をしっかりと把握せずに、子どもを疑ってはいけないと、深く反省しましたね。

荒波氏　親になり、始めから上手くできるわけじゃないですよね。

田代氏　子どもと関わる中で、親も学び、人として成長しているのだと思います。まさに、子育ては親育てなんですよ。

荒波氏　考えさせられるお話です。親として、しっかりしないといけないという義務感がありました。でも、少し肩の荷が下りた気がします。

提言「家庭教育の在り方」は家庭教育のススメ

荒波氏　今年4月に、市教委へ提出された報告書は、保護者に向けた提言なんですよね。

提言「家庭教育の在り方」

田代氏　はい。各分野に見識の深い社会教育委員が、自身の知見やさまざまな参考文献・資料を基に、編集した報告書です。完璧ではないかもしれませんが、家庭教育の大筋は捉えていると思います。本書には、読み手に問いかける形で、ノウハウを盛り込みました。多くの親御さんの参考になれば、うれしいです。

荒波氏　市Ｐ連（ＰＴＡ連絡協議会の略称）でも、広報活動などの場で活用したいと考えています。活動内容はお互い異なりますが、子どもの幸せを願うという点は、同じ思い。今後も、協力して頑張っていきましょう。

島田市社会教育委員 提言「家庭教育の在り方」

市社会教育委員が、市教育委員会の諮問を受け、家庭教育のあり方について考え方をまとめた報告書。

子どものライフ・ステージ（人生において節目となる各段階）を乳幼児期から高校生までの6つに分類。各段階における子どもとの接し方のポイントや、家庭の役割を記載。具体的事例のコラムも盛り込んでおり、家庭教育に悩んだときの羅針盤として、多くの人に役立ててもらうよう呼び掛けている。

※報告書は、市ホームページで閲覧できます。

問社会教育課 ☎36-7962

萩原淑恵（はぎわらとしえ）さん
―― 元・小中学校長。旗指

家族の温かさの中で、子どもが自ら考える力を育むことが大切です

子どもたちの
未来を描く
今すぐ始めたい家庭教育で大切なこと

子どもを自立させることは、昔から変わらない家庭の役割だと思います。そのためにも、まずは「自分は愛されているんだ」と実感できる家庭づくりが大切です。例えば、子どもと一緒に映画やドラマを見て、泣いたり笑ったりすることがありますよね。ぜひ、そのときの感情を共有してみてください。きっと、温かな空気が流れ、子どもの豊かな心が育まれると思います。

加えて、社会に出たときに困らないよう、きちんとしつけることも、とても大切ではないでしょうか。上手くいかない場合は、どのように教えれば伝わるのか、子どもの様子を見ながら工夫してみましょう。子どものために考えを巡らせることで、親もまた、人として成長できますよ。

また、家族の話し合いの場を設けることもおすすめします。話題は「夕飯のおかずは何がいい？」など、気軽で簡単なものでも大丈夫です。もし、スマートフォンが欲しいなどとせがまれたら、理由や注意点などを尋ね、子どもに考えさせてみてはどうでしょう。「あなたはどう思うの？」といった問い掛けに対して、子どもが自分で考え、親を相手に話すことは、自立に向けた準備として良い機会になる思います。同時に、日頃から親と話し合う習慣があれば、中学生や高校生になってからも、子どもにとっての良き相談相手となれることでしょう。話し合いが難しければ、手紙や交換日記などでやり取りをするのもいいですね。

わが子とはいえ、一人の人間。自分とは違う存在であることを改めて認識した上で、それぞれに合わせた家庭教育を実践してみてください。

小林朋子（こばやしともこ）さん
―― 静岡大学 教授
博士(教育学)

子どもが豊かに生きていけるよう、レジリエンスを育てましょう

「レジリエンス」とは、強いストレスで気持ちが落ち込んでしまったり、イライラして心の健康が下がってしまったりした状態から回復する力（精神的回復力）のことです。これは、誰もが持っていて、育てることができる能力。まずは、次のポイントについて、家族で心掛けてみましょう。

◉人とのつながりを大事にしましょう
◉早寝早起きなど、規則正しい生活をしましょう
◉ゲームやスマートフォンを使う時間をきちんと決め、守りましょう
◉リラックスできることをしましょう

具体例から考える育み方――

もし、子どもが落ち込んでいたら、耳を傾け、「そんなことがあったんだね。〇〇だったね」など、気持ちをくみ取ってあげましょう。

加えて、客観的な見方を養うことも、レジリエンスを育む上で大切な要素です。思い込みが先行してしまうと、トラブルにつながりやすい行動を起こしてしまうこともあります。子どもが、ある出来事に対して1つの考え方にとらわれてしまっていたら、気持ちを共有した上で他の捉え方ができないか、一緒に考えてみてあげてください。

コロナ禍で、さまざまなイベントが中止となり、行動にも制限が掛かるなど、多くの人が今までにない生活を強いられています。また、子どもや若者は、その世代ゆえの悩みを抱えることもあります。落ち込んだり悩んだりするのは、決していけないことではなく、むしろ自然なことです。だからこそ、そこから立ち直る力を育てることが、とても大切なのです。

寺岡実優（てらおかみゆう） 書記
―― 社会教育課

▽市では、0歳から18歳までの子をもつ親を対象に、発達段階に応じたさまざまなテーマの講座を開催しています。詳細は、随時広報しまだや市ホームページに掲載します。ぜひ、ご覧ください。

【参加した人の感想】

◉「初めて0歳児をもつ親の講座（BP）」に参加しました。同じ月齢の子を育てる親との会話から、悩んでいるのは自分だけじゃないんだと安心しました。今まで以上に、子どものことを愛おしく思うようになりました。

◉「小学生・中学生の子をもつ親の講座」に参加。まずは自分を大切にすることで、良い親子関係が築けると教わり、目からウロコでした。これからは、自分のこともちゃんと大事にします。

※家庭教育に関するお問い合わせは、社会教育課へお電話ください。

問社会教育課☎36-7963

9月、金谷東二丁目に住む間々下悠紀（ましたゆうき）さん・早織（さおり）さん・穂樺（ほのか）さん家族を取材した。この日は、みんなで散歩に出掛ける日だ。母の早織さんは「娘と日々関わる中で、新しい発見がいくつもあります。市の子育て講座に参加した際、託児サービスを利用しました。受講後、娘が自分よりも小さな赤ちゃんに対して、優しく接していたことを託児員の方から聞き、家では分からなかった、この子の新しい一面を知れて、うれしかったです。いつも優しく、思いやりのある人に育ってほしいという私たちの思いが、ちゃんと伝わっているみたい」と、夫と娘を見つめて微笑んだ。

このまちに暮らす私たち一人一人の関心は子育てに励む親の心の支えとなり安心して子どもと向き合える地域をつくる

家庭は、プライベートな空間であるため、外からの干渉を受けにくく、様子が見えづらい。このため、何か困ったことがあったときなどは、自ら動かなければならなくなる。だが、子育てに悩みを持ちながらも、孤立する家庭が増えやすい現状では、助けを呼ぶ声が周囲に届きにくい。

親の悩みは、子どもが成長するにつれて変わっていくだろう。大切なのは、わが子の変化を受け入れ、肌を、手を、目を、心を「離さない」よう、関与も形を変えながら続けることだ。子どもは、さまざまな経験の中で、親の愛情を実感する。だから、子どもの個性を尊重し、じっくりと向き合うことが、親子の絆を深め、それぞれの家庭教育のあり方を見つける手掛かりになる。

子育てに困ったとき、誰かが手を差し伸べてくれる地域の優しさは、親の心の支えとなり、悩みを打ち明けるなどの行動を起こすきっかけにつながる。人と人とのつながりは、今後ますます求められていくだろう。私たち一人一人が、助けを必要とする人に「大丈夫」と声を掛けることができれば、このまちはもっと優しくなれるはずだ。